

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	宮本法明
論文題目	Jホラーの表象文化論——メディアの交雑と生死の閾		
（論文内容の要旨） 本論文は、1989年以降に日本で作られたいわゆるJホラーと呼ばれる映画を対象とし、文献調査、理論的考察、テキスト分析を通して、Jホラー作品が小説や漫画など他ジャンル、他媒体と交わりつつ、生と死の境界に位置する事象を描いてきたことを明らかにしている。 高橋洋はJホラーの代表作の脚本を書き、その美学の確立に大きな影響力をもった。第1章は、高橋の脚本・監督作品における指さすという身振りに着目する。これは1980年代末の連続少女誘拐殺人事件犯人である宮崎勤が、実況見分において被害者の遺体を埋めた場所を指し示す映像の引用である。宮崎が残虐ビデオシリーズ『ギニーピッグ』を参考にして少女の遺体を切断したという報道がなされたことから、残酷描写を含むホラージャンルに対するバッシングが起こった。残酷描写を排して幽霊の表象に拘るJホラーはこのような歴史的文脈のなかで生まれた。『リング』（中田秀夫監督、1998年）をはじめ高橋が関わった多くの作品にこの身振りは登場し、Netflixシリーズ『呪怨 呪いの家』（三宅唱監督、高橋脚本、2020年）には宮崎をモデルにした人物が登場する。本章は、Jホラーに頻出する指差しの図像をJホラーの立役者たる高橋の内に抑圧されたものの回帰として捉えて分析する。 第2章では、伊藤潤二マンガのアダプテーションを聴覚メディアとの関係から検討する。学位申請者は、2000年前後の映画雑誌では、伊藤原作の映像作品が特にJホラーと呼ばれる傾向を見出し、清水崇と伊藤潤二の関係に着目する。映画美学校出身の清水はJホラーの正統的継承者とされつつも、先行世代とは対照的に怪物や暴力を過剰なまでに可視化してきた。その清水がグロテスク表現で知られる伊藤の『悪魔の理論』（1988年）を映像化（2000年）したことは、Jホラーの定義を複雑化させた。しかしながら、『戦慄の旋律』（1991年）も含め、伊藤作品の初期アダプテーションはいずれもレコードや盗聴など聴覚メディアを主題としており、可視と不可視を越えたメディアホラーとしてのJホラーの可能性を示唆している。 第3章は、『ドッペルゲンガー』（黒沢清監督、2003年）における制御とインターメディア性を検討する。黒沢作品は、立教大学で師事した蓮實重彦のモダニズム的枠組みのなかで評価されてきた。一方で、スプリットスクリーンを用いた本作は、リチャード・フライシャー『絞殺魔』（1968年）を介してエクспанデッドシネマの系譜に連なり、国際博覧会のコントロールルーム的発想とも関係づけられる。さらに黒沢は、同作の撮影にお			

いて、モーションコントロールカメラや小型ビデオカメラを用いて画面の統御と他者性の導入を両立させた。これらの要素は作品のインターメディア性を形成し、黒沢映画がモダニズム的言説から逸脱する契機を持つことを示している。

第4章では、角川書店のメディアミックス戦略のJホラーへの影響を検討する。角川は撮影所システム崩壊期に映画と出版を連動させ、角川ホラー文庫の創刊と日本ホラー小説大賞の創設によって市場を再編した。代表例である鈴木光司『リング』（1991年）と瀬名秀明『パラサイト・イヴ』（1995年）はいずれも映画化され、とくに『リング』はJホラーを代表する作品となる一方、『らせん』（飯田譲治監督、1998年）との二本立て上映や映像化の複雑な経緯はやがて忘却されていった。学位申請者はこうした文脈を掘り起こしながら、『パラサイト・イヴ』（落合正幸監督、1997年）と『らせん』に共通するクローン／ウイルスの主題に着目し、前者が映画のデジタル化と結びつくこと、後者が角川的メディアミックスへの自己言及として読めることを明らかにしている。

第5章は、Jホラーの理論的支柱と呼ばれながら論じられる機会が少なかった小中千昭の作品を、脳の主題に焦点を絞って分析する。小中千昭脚本、小中和哉監督の『脳内潜在麻薬物質リポートドラッグレス』（1991年）などに見られる脳の走査画像は、医療メディアの対象であると同時に神秘体験の媒介として描かれる。小中千昭がシリーズ構成を務めたアニメ『神霊狩／GHOST HOUND』（2007年）における幽体離脱のPOV（視点ショット）表現は、ポール・ヴィリリオのシネマティズム（遠近法的奥行きに分け入る発射体的視覚）とトム・ラマールのアニメティズム（レイヤーの操作による運動と視覚の創造）を併存させ、さらに、初期実写作品『邪願霊』（石井てるよし監督、1988年）のPOVショットへの自己言及を通じて、POVをめぐるいわゆる「小中理論」の枠組みの本人による相対化として位置づけている。

第6章では、Jホラーの最初期の作品である『邪願霊』と黒沢清『スウィートホーム』（1989年）に妊娠の主題が見出される点に着目し、この観点からJホラーの歴史を再検討する。以後の『死霊の罠2／ヒデキ』（橋本以蔵監督・小中千昭脚本、1992年）、『呪怨2』（清水崇監督、2000年）、『呪怨黒い少女』（安里麻里監督、2009年）、『ノロイ』（白石晃士監督、2005年）、『ほんとにあった！呪いのビデオ』シリーズから『呪怨 呪いの家』まで、妊娠表象とミソジニーの問題が持続していることを示す。さらに高橋洋監督の近作『ザ・ミソジニー』（2022年）が水子の霊を描きつつ、Jホラーに対するジェンダー論的批判へ応答していることを明らかにした。

このように、本論文は、各章で検閲と無意識、可視性と聴覚、制御とインターメディア性、ウイルスとメディアミックス、脳とPOV、妊娠というように、メディア史的、生政治的に重要な主題を取り上げ、緻密な文献調査と大胆な解釈を通してJホラー史の再記述を立ち上げている。

(論文審査の結果の要旨)

Jホラーとは、1990年代から日本で製作されたホラー映画であるが、狭義には、グラフィックな残酷描写よりも演出やカメラワークによる幽霊の表象に注力し(脚本家・映画監督の高橋洋と小中千昭によって提示されたいわゆる「小中理論」にまとめられている)、都市伝説と積極的に増幅し合い、写真やビデオ、レコードなど複製技術とメディアに宿る魔を描いて「不気味なもの」を生み出す映画美学実践として捉えられる。中田秀夫の『リング』や清水崇の『呪怨』はハリウッドでもリメイクされ、Jホラー美学とイコノロジーは世界のホラー映画史に大きな影響を与えてきた。本論文は、Jホラーとは何かという厄介な問いから出発し、上記のようなJホラー美学言説と密な対話を行うと同時に、文献調査を行ってその枠組み自体を再検討し、あるいは拡張しつつ、Jホラー史の再記述を行う挑戦的な試みである。本論文の学術的な貢献は下記の4点に集約される。

第一に、Jホラーは上記の通りグローバルな展開をしたため、英語圏でも研究が盛んである。一方で、日本語では、鷲谷花、石田美紀、前川修、川崎公平、阿部嘉昭、鈴木潤らによる研究蓄積があり、ジェンダーやメディア、作家性について議論が重ねられてきた。本研究は、未出版の博士論文も含む日本語と英語の先行研究にほぼ網羅的にあたって批判的に検討しており、現時点でのJホラー研究史として読むこともできる。

第二に、そのうえで本論文は、これまで看過されてきた論点を立て、映画史的、メディア史的な文献調査を行うことによって、日本語で書かれた日本映画史として新規性を打ち立て、成果を挙げている。そもそも「Jホラー」という語の初出はいつか、どのような文脈で使われたのか、これまで問われてこなかった。学位申請者は1990年代から2000年代にかけての映画雑誌や新聞を対象に丹念な調査を行い、さらにその成果を伊藤潤二のマンガとその翻案という新しい方向性に繋げている(第2章)。また、鈴木光司の小説『リング』と角川の関係はこれまであまり論じられておらず、小説のマーケティングとの関係や二本立て興行などを考慮に入れることで、映画史におけるメディアミックス研究にも貢献している(第4章)。連続少女殺人事件とJホラーとの関わりについては、これまでも鶴田法男監督のような作り手によって言及されることはあったが、学位申請者は当時のマスコミや政治家、行政や業界の動きについて調査し、説得力のある議論を行っている(第1章)。

第三に、ジェンダーに関心を払い、Jホラーの初期のターゲット観客は若い女性であったと指摘する先行研究を紹介し、妊娠表象については第6章を充てるなど、ホラー映画でしばしば問題化されるミソジニーを意識的に議論の俎上に載せている。このようなジェンダーへの関心は、単なる政治的な配慮ではなく、ウイルス感染や生殖など、Jホラーの主題は「生と死の闘」を描くことであるという本論文の問題意識と有機的に結びついている。

第四に、決して映画史に閉じることなく、思想や美術批評など、他領域における研究成果や概念を積極的に取り入れ、人文学的に面白い解釈を提示しようという挑戦的な姿勢を打ち出している。例えば、第3章においてモダニズムを中心的な論点としていることは、異論の可能性も含めて、議論のスコップを広げ、接続可能性を高めていることは疑いない。

しかしながら、まさにこのような挑戦的な姿勢のために理路が危うくなり、論証に飛躍が感じられる部分があるのも事実である。例えば、第1章の指差しの身振りの分析は刺激的だが、高橋洋の無意識というよりは意識的な引用としても説明しうるのではなかろうか。また、ホラー映画研究においては常に中心的な課題と

されてきた観客、とりわけ観客のジェンダー、セクシュアリティ、情動の問題について、先行研究に言及するのみで、学位申請者自身によっては議論が深められていない。全体として、これまで語られてこなかった作品や作家を積極的に取り上げているため、新規性と専門性の高い研究になっていると同時に、Jホラー論としてみると、対象の全体像がつかみにくい。

このような問題点はあるものの、緻密な歴史研究と大胆な仮説、鮮やかな読みによってJホラー史を書き換える本論文が、高い学術的価値を有することは疑いない。よって、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和8年1月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降